大阪公立大学 Osaka Metropolitan University 学術情報リポジトリ

# 『道徳經』にみえる「精」と房中術：廣成子・大成・容成等、「成」のつく人物との関わりから (平木康平教授退職記念号)


| メタデータ | 言語: jpn |
|---|---|
| | 出版者: |
| | 公開日: 2010-06-23 |
| | キーワード (Ja): |
| | キーワード (En): |
| | 作成者: 大形, 徹 |
| | メールアドレス: |
| | 所属: |
| URL | https://doi.org/10.24729/00004458 |

# 『道徳經』にみえる「精」と房中術
## ――廣成子・大成・容成等、「成」のつく人物との関わりから――

大形　徹

### はじめに

前漢、司馬遷（前一四五（一三五）～?）の『史記』には老子韓非列傳があり、老子の伝が記されている。老子はのちに道教の中の最高神である太上老君となる人物である。『史記』では、老子が関令の尹喜に請われて『道徳經』という書物を著したとされる。いわゆる老子道徳經である。

けれども『道徳經』の中には、人名は全くあらわれず、老子という人物が登場するわけではない。つまり、『道徳經』と老子は、本来、とくに関係があるようにはみえない、ということになる[1]。

老子は老聃と呼ばれているが、その名は『荘子』に多出する。『荘子』もまた老荘思想の一翼を担う書物であるから、都合がよいようにみえる。けれども、老聃の初出と思われる内篇、養生主篇は、のちに太上老君となるべき運命をもっていた老子にとっては、やっかいな文章から始まっている。そこでは「老聃死」となっているのである。

同じ『荘子』でも、後学の手になる天下篇になると、『道徳經』の内容と老子を結びつけるような文章がでてくる。けれども、養生主篇のままでは、老聃は長生不死の代表とはなりがたいのである。『道徳經』には、無為自然だけでなく様々な思想が包含されている。そのなかで、

冥中精有り、其の精甚だ真、其の中信有り。（二十一章）
（冥中有精、其精甚真、其中有信）

という文章が、馬王堆の房中術関係の書物の思想の核心とされていく。

『荘子』外篇、在宥篇の中にも房中に関わる表現がみえる。それは房中理論と説話を組み合わせたようなものであって、細かな技術の話ではない。そこに「精」の語がみえるが、それは『道徳經』の

中に説かれているのものと同じである。そこにみえる人物が「廣成子」である。

「廣成子」は『莊子』中の、おそらく架空の人物であるが、その人物像の形成は、『道徳經』の思想内容と大いに関係があると思われる。つまり、『道徳經』から生み出された人物像であるといえる。

## 一、『道徳經』の精と『列仙傳』の精

老子という人物は『史記』では周の図書室の役人とされている。そこですでに、二百餘歳とされているが、『列仙傳[2]』では仙人とされ、その後、道教では太上老君という神となる。

『列仙傳』で仙人となった理由としては、

> 好んで精氣を養い、接して施さざるを貴ぶ[3]

と精を愛しむ房中術の方法が説かれており、他の理由は何もしるされていない。

そのため、老子は房中術によって昇仙した[4]ことになる。

> 老子、姓は李、名は耳、字は伯陽、陳人なり。殷の時に生まれ、周の柱下史と爲る。好んで精氣を養い、接して施さざるを貴ぶ。轉じて守藏史と爲る。積むこと八十餘年、史記に云う、二百餘年、時に稱して隱君子と爲す、謚して曰く、聃、と。仲尼周に至り、老子を見、其の聖人なるを知り、乃ち之れを師とす。後ち周の徳衰え、乃ち青牛の車に乘り、去りて大秦に入らんとし、西關を過ぐ。關令尹喜待ちて之れを迎え、眞人を知るなり。乃ち強いて書を著さしめ、道徳經上下二巻を作る[5]。(『列仙傳』巻上)

さて、『史記』にはなく、『列仙傳』で初めて付加された「好養精氣、貴接而不施」という房中術的な部分は、一体、何にもとづくのであろう。

「精」は男性の精液にも通じる言葉で、房中術関係の書物のキーワードである。

「はじめに」であげたように、『道徳經』二十一章には、「冥中有精、其精甚真、其中有信」とみえ、直接的には、この部分と関係があるとみてよいだろう。

『道徳經』のこの部分はぼんやりとした表現だが、『莊子』外篇、在宥の

> 至道之徳、窈窈冥冥…無搖女精、乃可以長生

(至道の徳、窈窈冥冥…女の精を搖する無くんば、乃ち以て長生す可し)

になると、かなり具体的な房中術の話となっている。

そして、その目的も「長生」と明確である。また「無搖女精」は、表現は異なるものの『列仙傳』の「好養精氣、貴接而不施」と同様の意味であろう。つまり、大切な「精」を無駄遣いしないように、ということであろう。

在宥ではさらに、

我れ女の爲に大明の上に遂げ、彼の至陽の原に至らん。女の爲に窈冥の門に入り、彼の至陰の原に至らん[6]。

と述べられる。

ここでは、「大明の上」と「窈冥の門」が対比されている。大明は至陽であり、窈冥は至陰である。

金谷治は、『禮記』禮器篇に「大明は東に生じ、月は西に生ず」とあることから、「大明」を太陽と解釈している[7]。そして、この部分を、

わしはあなたのために輝く太陽の上までものぼり、あの純粋な陽気の源（みなもと）にまでゆきつこう。あなたのために窈（おくぶか）く冥（くら）い地底の入り口を入り、あの純粋な陰気の源にまでゆきつこう[8]。

と解釈している。

この部分は陰陽で捉えられているが、それはまた男女にも関わってくる。

馬王堆出土『胎産書』の

人之産也、入於冥冥、出於冥冥、乃使爲人

(人の産まるるや、冥冥に入り、冥冥より出づれば、乃ち人と爲らしむ)

もよく似た表現である。

「冥冥に入り、冥冥より出づれば」も、この『莊子』を下敷きにすれば、「窈冥の門」ともつながっていくだろう。また『莊子』では、太陽と対比されているが、『胎産書』のこの部分では、冥冥＝窈冥の門であり、それはまた後で取り上げる「玄牝の門」(第六章)にもつながる。

『胎産書』には「精」という言葉はない。しかし、『莊子』や『道德經』では、「冥」と「精」が結びつけられている。『胎産書』でも、「冥」と記すことによって、「精」の存在を暗示しているようにみえる。「精」がなければ、子は生まれないのである。

『胎産書』では、

三日の内、之れを放たば子有らしむ[9]。

と、いう表現があり、「之」にあたる部分は、「精」と理解されている[10]。

ただし、『胎産書』は、子を産むための書物で、「精」を惜しんで長生をめざす房中術とは明らかに立場が異なっている。

後世の『産經』にも、

人の始めて生まるる、冥冥より生まる[11]

とみえ、この表現が踏襲されている。

## 二、「成」のつく人名、廣成子・大成・容成公・務成子と老子

『莊子』在宥には廣成子という人物があらわれ、さきに述べたような房中術の話を述べる。『道德經』には、人物は登場しないため、『莊子』在宥の廣成子が『列仙傳』の房中術を説く老子という人物の原形の一部分となる、ともいえる。

後世の注釈ではあるが、

廣成子、或いは云う卽ち老子[12]（『莊子』在宥、『釋文』）

廣成は、卽ち老子の別號なり[13]（同疏）

と、廣成子が老子だという説もある。

馬王堆出土の房中術の書である『十問』では「大成」という人物がみえる。この人物名はおそらく『莊子』外篇、山木の「大成之人」と関連する。

これも後世の注だが、唐の成玄英は、

成云う、大成の人は、卽ち老子なり[14]（同、成玄英疏）

と老子そのものだと述べている。

なぜ成玄英がそう述べるかといえば、『道德經』の中に、

大成は缺けたるが若し。（四十五章）

（大成若缺）

という言葉がみえるからであろう。

容成もまた『十問』や『列仙傳』で房中術と結びつけられている。『列仙傳』では、「容成公」と呼ばれているが、その内容は、老子について述べられていることとほぼ同じである。また、そこでは老子の師とされている。つまり、容成公と老子は、二重写しのような構造となっているのである。また容成公は房中家の『容成陰道』二十六巻[15]とも関係があると思われる。

同様に「務成子」もまた房中八家の一つである『務成子陰道』と関連するだろう。

これまでみた廣成子・大成・容成・務成子はいずれも、その名に「成」がついている。

ほかに、房中術とは無関係だが、「伯成子（『莊子』外篇、天地）」は、その名に「成」をもっている。この人物もまた『釋文』では老子の別名とされている。

そこでは、

伯成子高は『通變經』に云う、老子は此の天地開闢從り以來、吾が身、一千二百變し、後世、道を得、伯成子高、是れなり、

とみえる。

そこでは、老子は外見が千二百回も変化し、そのことによって後世、道を得たとされているのである。この変化とは、どういうことなのだろう。

『列仙傳』范蠡には、

范蠡は…越の大夫爲り、勾踐を佐け呉を破る。後ち輕舟に乘り海に入り、名姓を變じ、齊に適き、鴟夷子と爲る。更に後ち百餘年、陶に見（あら）われ、陶朱君と爲り、財は億萬を累ね、陶朱公と號す。後ち棄て、蘭陵に之き、薬を賣る、後人、世世、之れを識見す[17]。

と越王勾踐の軍師として著名な范蠡が、姓名を変え、鴟夷子になり、また陶朱公となったと記す。

陶朱公は富裕で著名な人物である。おそらく、本来、范蠡とは無関係であろう。けれども、ここのように名姓を変じたといえば、同一人物であることを否定することはできなくなるのである。

『通變經』の「一千二百變」は、この形式によく似ている。この

言い方であれば、全く姿形、経歴の異なる何名かの人物を同じ人物だとすることが可能である。

先にあげたものは、いずれもその名に「成」がついている。その名に「成」がつく人物は数多く、たんなる偶然[18]かもしれない。けれども、それらは、「大成若缺」という『道德經』自身の内容から生み出され、変化していったと考えることはできないだろうか。

## 三、老聃死す

『莊子』養生主は養生のことを説く。それにも関わらず、

老聃死す、秦失、之れを弔う[19]。

と「老聃」は死んだとされている。

これは「老聃」に関する傳承のおそらくもっとも古いものの一つだが、「老聃」は養生を体得できなかったのであろう。「死す」とされている。

『莊子』本文には「老聃」という人物が『道德經』の作者だという説はない。ただ、老聃の言葉の中に『道德經』の言葉に近いものはみえる。

成玄英の疏は、

老君は即ち老子なり。姓は李、名は耳、字は伯陽、外字は老聃、大聖人なり。陳國の苦縣に降生す。周の平王の時に當たる。周を去り、西のかた流沙に度り、罽賓に適之く。而れども内外の經書に、竟に其の跡無くして、此に獨り死すと云えるは、死生の理、泯一にして、凡聖の道、均齊なるを明らかにせんと欲す。此れ蓋し莊生の寓言なるのみ。老君は大道の祖爲り、天地萬物の宗爲り、豈に生死有らんや。故に此の言に託して、聖人も亦た死生有りとし、以て死生の理を明らかにするなり。故に老君、降生し、教を行い、昇天すること、備く諸經に載するも、具さには言わざるなり[20]。

という。

老子が、その後、仙人となり太上老君という神とされていくことから、「老聃死」は『莊子』の寓言だろうとしている。

けれども『莊子』以前に老子という人物が本当にいたのかどうかは不明であるため、その注釈はそのまま受け取ることはできない。『史記』老子傳によれば、『道德經』という書物は老子という人物が書いたとされている。

けれども、本来、書名はなく、上篇の最初の文字、「道」と下篇の最初の「上徳不徳、是以有徳」の「徳」の文字をあわせて、『道徳經』と呼ばれたようだ。そのため、老子とよばれる人物が本当に『道徳經』の作者とは考えられていない。

しかし、『道徳經』の内容が老子という人物の伝記にも影響していく。『莊子』徳充符では老聃は、「死生を以て一條と爲す[21]」とされ、死と生を一とみなす『莊子』の思想を体現した人物とされている。これは長寿をねがう人物ではない。

けれども、『莊子』天下の老聃は

> 其の雄を知り、其の雌を守らば、天下の谿と爲る、其の白を知り、其の辱を守らば、天下の谷と爲る。人皆な先を取り、己れ獨り後ちを取り、曰く、天下の垢を受く、と。人皆な實を取り、己れ獨り虛を取り、藏する無きが故に餘り有り、巋然として餘り有り。其の身を行うや、徐ろにして費やさず、爲す無くして笑い巧たり、人皆な福を求め、己れ獨り曲全なり。曰く、苟しくも咎を免れん、と。深を以て根と爲し、約を以て紀と爲し、曰く、堅ければ則ち毀たる、鋭ければ則ち挫かる、と。常に物に徳容たれ、人に削られざれば、至極と謂う可し[22]。

と、述べている。

これは、『道徳經』第二八章の、

> 其の雄を知り、其の雌を守らば、天下の谿と爲る。天下の谿と爲らば、常の徳離れず、嬰兒に復歸す。其の白を知り、其の徳を守らば、天下の式と爲る。天下の式と爲らば、常の徳、忒わず、無極に復歸す。其の榮を知り、其の辱を守らば、天下の谷と爲る。天下の谷と爲らば、常の徳、乃ち足り、樸に復歸す。樸散ずれば則ち器と爲り、聖人之れを用うれば則ち官の長と爲る。故に大制は割かず[23]

に似ている。

ここでは明かに老聃が『道徳經』の作者であるとみなしているようであり、それが『史記』老子傳へと結びついていくのであろう。

また『禮記』曾子問にみえる老聃は、

> 孔子曰く、吾れ諸れを老聃に聞けり[24]。

と、孔子が老子に礼を問う内容になっている。これもまた『史記』

老子傳の内容に関わってくる。

## 四、天地

『道德經』には、天地という言い方が多くみえる。

天は長く地は久し。天地の能く長く且つ久しき所以は、自ら生ぜざるを以てなり、故に能く長生す[25]。（第七章）

は、天地の寿命が長いことを説く。

谷神は死せず、是れを玄牝と謂う。玄牝の門、是れを天地の根と謂う。綿綿として存するが若し、之れを用うるも勤きず[26]。（第六章）

は、玄牝や玄牝門が天地の根だという。

この玄牝は『列仙傳』容成公において、

容成公なる者は、自ら黄帝の師と稱し、周の穆王に見ゆ。能く補導の事を善くし、精を玄牝に取る、其の要は谷神は死せず、生を守り氣を養う者なり。髮白くして黒に更まり、歯落ち更めて生え、事、老子と同じ、亦た云う老子の師なり[27]。

と、されている。

この「善補導之事、取精於玄牝」の玄牝は明らかに女性をさす。また容成公の内容は、『列仙傳』の老子の傳と同じで、老子の師ともされるという。

天地、相い合し、以て甘露を降らす[28]。（第三二章）

は、その天地が合することをいう。

張家山漢簡『引書』では、

露（露）の清を逆え、天地の精を受く[29]

とみえる。

「露の清」と「天地の精」は互文のようになっていて、天地の精が甘露であるという発想で、それを飲めば長生できる、とするのだろう。

『漢書』郊祀志には、「承露仙人掌[30]」のことが記されている。これは露を受けるための仙人の掌ということである。また、『三輔故

事』には、武帝の時代に建章宮に巨大な承露盤[31]があったことを記す。いずれも天からの甘露を受け取る装置である。武帝は甘露を飲めば仙人になれると考えたのだろう。

## 五、天地之精か天地之情か？

『十問』には、

君必ず天地の請（情）を祭して、之れを行らすに身を以てせよ。徴有るは間に智（知）る可し。聖人其の能くする所に非ずと雖も、唯だ道ある者のみ之れを智（知）る。天地の至精、無徴に生まれ、無刑（形）に長じ、無⿰月豊（體）に成る、得る者、壽長く、失う者、夭死す[32]。

と天地之至精という言葉がみえ、それを得れば長寿となるという。

ここの「君必祭天地之請（情）」の「天地之請」の「請」は、「請」でもなく、「情」でもなく、「精」ではないか。そうだとすれば、「天地之精」ということになる。

馬繼興『馬王堆古医書校釈[33]』は「天地之情」と解し、麥谷邦夫等も「情」ととる[34]。一問にすでに「天之請」という句があるが、そこもまた「情」とされている。

『易』大莊に「正大、而天地之情可見矣」、『禮記』祭義に「昔者聖人建陰陽天地之情」とあり、「天地之情」の句はみえる。

また「請」を「情」ととる例は『古漢語通假字字典[36]』五四六頁「請」にも多数示されている。

しかし、『帛書老子』甲本・乙本ともに

中有請（德）也。其請（德）甚真。（第二十一章）

とみえ、「請」を「德」と解釈する例は馬王堆の文献中にある[35]。

河上公注や王弼注本は「請」ではなく「精」であるため、ここの「請」は明らかに「精」の意味である。

『十問[37]』では、すぐあとに「天地之至德」とあらわれる。この部分の文脈からみても「精」であろう。かりに「情」であっても「情」は「精」に通じ[38]、「精」の意味で理解しうる。

「天地之德」は『莊子』在宥に「吾欲取天地之德、以佐五穀、以養民人」とみえる。ここでは「精」である。それに「吾れ天地の德を取り、以て五穀を佐け、以て民人を養わんと欲す」と訓読しても違和感はない。

なお、高明撰『帛書老子校注[39]』は、河上公注や王弼注本等の『老子』第二十一章「其中有德、其德甚真」の「精」自体が誤りで、本来、「情」でなければならないという。その根拠は帛書の「請」

を「情」と解することによる。高明の説には従えないが参考としてあげておく。

## 六、陰陽

『黄帝内經素問』陰陽應象大論には、「陰陽なる者は、天地の道なり[40]」とみえ、「陰陽」と「天地」が結びつけられている。

『漢書』芸文志、陰陽家にも、『容成子』十四篇という書名がみえ、

陰陽家者流は、蓋し羲和の官に出づ、敬しんで昊天に順い、日月星辰を歴象し、敬しみて民に時を授く、此れ其の長ずる所なり[41]。

と説明されている。

羲和は、『楚辞』離騒の王逸注で、「日御」とされており、太陽の御者である。ここには、「日月星辰」とみえるが、陰陽観念は、太陽と月と密接に関連している。

御手洗勝氏は、羲和を「日御としての羲和[42]」・「太陽神としての羲和[43]」と太陽と結びつけて考察している。

『十問』では、容成は「黄帝、容成に問いて曰く…[44]」と黄帝の師とされている。文中には、天地之道、天気、地気といった語がみえる。これらを陰陽で解釈することも可能であろう。

『列仙傳』でも、「容成公者自稱黄帝之師…[45]」と、やはり、黄帝とペアになっている。

容成は先にみた房中家の『容成陰道』二十六巻の作者ともされている。陰陽は男女でもあり、房中術と容易に結びつく。

## おわりに

房中術関係で名前のあがる廣成子・大成・容成公・務成子は、『道德經』の思想である「精」と『道德經』の中の言葉である「大成」の「成」の文字を核として、次第につくり挙げられてきた人物像のように思われる。

これは『史記』老子傳の孔子と老子の問答が、『莊子』や『禮記』にみえる孔子と老子の問答にもとづくものの、『道德經』の思想内容とはあまり関わらないことと対照的である。

廣成子・大成・容成公・務成子それに伯成子などは、実在ではなく架空の人物だと思われる。しかし、彼らは『道德經』の思想の一部分がふくらんで人物像として結実したものであろう。それらは『史記』で述べられる老子像よりも、むしろ、『道德經』の思想内容

を深く体現したものではないか。

『史記』では、老聃と関尹子の問答から、『道德經』が生み出されたとされる。この話は、あまりにも有名である。けれども、もし、その話が『史記』に採録されていなければ、後世、老子のかわりに廣成子等が、『道德經』の作者とされていたかもしれず、書物の内容との関連を考えれば、むしろ、その方が、ふさわしかったようにすら思われる。後世の注釈で成玄英等が、それらの人物名を老子の別名としているのは、そのような意識を反映しているのだろう。

※本稿は二〇〇七年四月二十三日に西安で開かれた「国際道徳経論壇」で発表した中国語原稿「老子裡的精与房中術—関于廣成子・大成・容成」（『国際道徳経論壇論文集』下巻、宗教文化出版社、二〇〇七年、九三二頁〜九三六頁に収録）をもとに、「はじめに」の部分、その他を加筆し、日本語で記したものである。

※本稿は、平成十九年度科学研究費基盤研究（C）、「中国古代における太陽とロータスと鳥の図像的イメージと神仙思想」による研究成果の一部である。

## 註

1　たとえば、武内義雄「老子原始」に、「老子伝の疑ふべき多きこと斯の如し。是に於てか先儒或いは老子の存在を否定して架空の人物となし、五千言を以て後人の仮託に出づとなす（崔述考信録、蘭嵎老子是正序）」（『武内義雄全集　第五巻　老子篇』角川書店、十九頁）と述べられている。

2　前漢、劉向撰だが、実際には後漢頃の作とされている。尾崎正治、平木康平、大形徹、鑑賞・中国の古典9『抱朴子・列仙伝』（角川書店、一九八八）の『列仙伝』部分を平木康平と共同執筆、その解説部分を参照。

3　好養精氣、貴接而不施。

4　拙稿「老子と房中術」、「人文学論集」第9集、七七〜九二頁、一九九一、を参照。

5　老子、姓李、名耳、字伯陽、陳人也。生於殷時、爲周柱下史。好養精氣、貴接而不施。轉爲守藏史。積八十餘年、史記云、二百餘年、時稱爲隱君子、謚曰、聃。仲尼至周、見老子、知其聖人、乃師之。後周德衰、乃乘靑牛車、去入大秦、過西關。關令尹喜待而迎之、知眞人也。乃強使著書、作道德經上下二卷。（『列仙傳』巻上）

6　我爲女遂於大明之上矣、至彼至陽之原也。爲女入窈冥之門矣、

至彼至陰之原也。

7 金谷治訳注『荘子』第二冊、岩波文庫、一九七五、七八頁。

8 同、七九頁。

9 拙著『胎産書・十問他』、馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会編、東方書店、二〇〇八、刊行予定を参照。

10 『馬王堆古醫書考釋』、湖南科学技術出版社、一九九二、胎産書。

11 人之始生、生於冥冥、丹波康頼撰『医心方』巻廿二所収『産経』、人民衛生出版社、一九五五、四八六頁。

12 廣成子、或云卽老子。

13 廣成、卽老子別號也。

14 成云、大成之人、即老子也。

15 『漢書』藝文志。

16 伯成子高通變經云、老子從此天地開闢以來、吾身一千二百變、後世得道、伯成子高是也。

17 范蠡…爲越大夫、佐勾踐破呉。後乘輕舟入海、變名姓、適齊爲鴟夷子。更後百餘年見於陶、爲陶朱君、財累億萬、號陶朱公。後棄之蘭陵賣薬、後人世世識見之。

18 「国際道徳經論壇」の席上、評議人の王卡氏から、そのように批評された。

19 老聃死、秦失弔之。

20 老君即老子也。姓李、名耳、字伯陽、外字老聃、大聖人也、降生陳國苦縣。當周平王時、去周、西度流沙、適之罽賓。而内外經書、竟無其跡、而此獨云死者、欲明死生之理泯一、凡聖之道均齊。此蓋莊生寓言耳、而老君爲大道之祖、爲天地萬物之宗、豈有生死哉。故託此言聖人亦有死生、以明死生之理也。故老君降生行教昇天、備載諸經、不具言也。

21 以死生爲一條。

22 知其雄、守其雌、爲天下谿、知其白、守其辱、爲天下谷。人皆取先、己獨取後、曰、受天下之垢、人皆取實、己獨取虚、無藏也故有餘、巋然而有餘。其行身也、徐而不費、無爲也而笑巧、人皆求福、己獨曲全、曰、苟免於咎。以深爲根、以約爲紀、曰、堅則毀矣、鋭則挫矣。常德容於物、不削於人、可謂至極。

23 知其雄、守其雌、爲天下谿。爲天下谿、常德不離、復歸於嬰兒。知其白、守其德、爲天下式。爲天下式、常德不忒、復歸於無極。知其榮、守其辱、爲天下谷。爲天下谷、常德乃足、復歸於樸。樸散則爲器、聖人用之則爲官長。故大制不割。

24 孔子曰、吾聞諸老聃。

25 天長地久。天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生。

26 谷神不死、是謂玄牝。玄牝之門、是謂天地根。綿綿若存、用之

不勤。

27　容成公者、自稱黄帝師、見於周穆王。能善補導之事、取精於玄牝、其要谷神不死、守生養氣者也。髮白更黒、歯落更生、事與老子同、亦云老子師也。

28　天地相合、以降甘露。

29　逆露之清、受天地之精。高大倫『張家山漢簡《引書》研究』、巴蜀書社、九一頁。なお高大倫氏は、清を沖和之氣ととらえている。

30　『漢書』郊祀志に「其後又作柏梁、銅柱、承露僊人掌之屬矣」とみえる。

31　前掲、『漢書』郊祀志所収の師古曰に、「三輔故事云建章宮承露盤高二十丈、大七圍、以銅爲之、上有仙人掌承露、和玉屑飲之。蓋張衡西京賦所云、立修莖之仙掌、承雲表之清露、屑瓊蕊以朝餐、必性命之可度也」とみえる。

32　君必察天地之請（情）、而行之以身。有徵可智（知）間。雖聖人非其所能、唯道者智（知）之。天地之至精、生於無徵、長於無刑（形）、成於無體（體）、得者壽長、失者夭死。

33　前掲、拙著『胎産書・十問他』を参照。

34　山田慶児編、『新発現中国科学史資料の研究』訳注篇、京都大学人文科学研究所、一九八五、麥谷邦夫訳注『養生方』（現在は『十問』とされている）四、三〇七頁。

35　池田知久『老子』、馬王堆出土文献訳注叢書編集委員会編、東方書店、二〇〇七、二五九頁にさまざまな説が詳しく紹介される。ただし、池田氏自身は「精」ではなく「情」と解している。

36　馬天祥、蕭嘉祉編、陝西人民出版社、一九九一。

37　『十問』に関しては前掲拙著『胎産書・十問他』、を参照。

38　『上古漢語通仮字字典』、九十三頁。

39　中華書局、一九九六、三三三〇頁。

40　陰陽者、天地之道也。

41　陰陽家者流、蓋出於羲和之官、敬順昊天、歴象日月星辰、敬授民時、此其所長也。

42　『古代中国の神々』、創文社、四八〇頁。

43　同四八四頁。

44　黄帝問於容成曰…。

45　容成公者自稱黄帝之師…。